

横浜・元町商店街。研修したスタンドは今はない

は、ステージの上でスポットライトを浴びてターンする瞬間だけ。一年間の結婚生活を経て一九八二年に書き下ろした二作目の「ブリリアントな午後」は、そうしたファッションモデルが主人公でした。女性誌「25 ans」「Hanko」での短編連作。「週刊朝日」での長編「オン・ハッピーネス」。いずれも女性の一人称で描いた作品群です。

高度消費社会における私たちの豊かさ
と儂さ、そして真の確かさとは何か。小説だけでなく「朝日ジャーナル」の「フアディッシュユ考現学」に象徴される社会評論、その後に携わった行政や政治でも、僕が希求し続けてきたテーマです。

(作家)



ガソリンスタンドで研修

たなか やすお
田中 康夫



私の

東京物語

8

全10話

あみだくじを引くと実地研修先は横浜。それもヨコハマ・トラッドハマトラの聖地として一世を風靡していた元町商店街に隣接するガソリンスタンドでした。

いらっしやいませ！ ありがとございます！ 自分の作品に登場するプチックのワゴン車へ給油。その経営者の黒塗りにワックス掛け。菜っ葉服を脱いで都心に戻ると、はるか年上の編集者に「センセイ」と呼ばれ、〈ジキルとハイド〉な自分に戸惑いを覚える日々が続きます。二カ月間の研修後に僕は退社し、著述の世界に入りました。

自分が自分であることを確認できるの